

ミャンマー国初等教育カリキュラム改訂プロジェクト（CREATE）



教科書編集のためのオンライン研修の実施

(2020年10月)

新型コロナウイルスの影響が世界各地へと広がっている中、2020年5月に行う予定だったカウンターパートを対象とした来日による本邦研修は中止となりました。しかし、ミャンマー側からの研修実施の要望は大きく、8月にミャンマーと日本を繋いだオンライン研修を開催しました。

教科書編集のためのオンライン研修

2020年8月24日～28日に、Zoomでミャンマーと日本を繋ぐ「教科書編集のためのオンライン研修」を行いました。参加者は、教科書編集を担当するカウンターパートおよび教育省カリキュラム課職員合わせて7名です。研修プログラムは11コマの講義、毎日のリフレクション、グループワーク、発表会で構成しました。カウンターパートが研修を受けることによって、「小学校のカリキュラム・教科書開発への理解を深め、ミャンマーでの教科書開発プロセスを牽引できるようになること」、「5年生までの教科書開発経験と本研修での学びを踏まえ、今後のミャンマーにおける教科書開発、授業展開、アセスメントについて示唆を得ること」を目指しました。



オンライン研修の実施方法と工夫

本邦研修のオンライン化は本プロジェクトでは初めての試みであり、今までにプロジェクト専門家もミャンマー政府も実施経験がありませんでした。また、準備を開始した5月はミャンマー・日本ともに新型コロナウイルスの感染拡大状況が予測できない時期でした。そのため、日本側の研修担当者と現地スタッフとの4回のテスト、講師と通訳者と研修担当者を繋いだ10回のリハーサル、9回の打合せ、毎日のメールのやりとりを重ね、「いかに感染予防対策を講じながらスムーズなオンライン接続を実現し、できるだけ本当の本邦研修に近いものにするか」を念頭に、次のような工夫を凝らして本番に臨みました。

● スムーズなオンライン接続のための工夫

日本とミャンマーの双方をつなぐツールとして Zoom を使用しました。研修担当者が Zoom のホストとなり、ミャンマー側と日本側とをつなぐ形式を取りました。現地のインターネット環境に合わせて、ミャンマー側の会場のパソコン1台を Zoom につなぎ、Zoom 画面をスクリーンに映し出し、研修員がそれを見ながら一斉受講しました。ミャンマー側の会場は、プロジェクトオフィスで一番大きいホール（日本の小学校の体育館程の大きさ）に設け、席と席の間に2mのソーシャルディスタンスが取れるようにしました。また、通訳



ミャンマー側では体育館程の広いホールを会場とし、スクール形式の席を設けた。



ミャンマー側ではPC1台をZoomにつなぎスクリーンに講師を映した。



Zoom 設定が難しい講師には Zoom ができる会議室を整備した。

者がマスクをして話し続けると呼吸が苦しくなるため、マスクをせずに済むよう、研修員から離れて向かって90度の向きに座りました。インターネット接続については、現地とのテストの際にはスコールや停電によるインターネット遮断も経験しましたが、本番中はITスタッフが別室から状況をモニターし、安定した接続を確保しました。日本側講師は、オンライン講義経験がない方であっても、「ミャンマーの教育発展のためならば」と前向きに協力してくださいました。講師にはZoom設定とインターネット環境整備をお願いしましたが、あとはパソコンの前で話すだけで良いようにし、研修担当者が進行やミャンマー語のスライド操作を担当しました。そうすることで、講師ができるだけ普段通りに講義を行えるようにしました。

● 新型コロナウイルス感染予防対策面での工夫

研修員7名と通訳者1名が同じ場所で5日間研修を受けるので、感染者を絶対に出さないようにしたいという思いがありました。もともとプロジェクト独自に作成していた「CREATE 事務所における新型コロナウイルス感染予防ガイドライン」を研修前に配布し、会場受付にアルコール除菌ジェル・スプレー、マスクを設置し、グループワーク時のフェイスシールド着用をお願いしました。また、グループワーク時に机や席を隣の人と近づけても、もとのソーシャルディスタンスに戻せるよう、床にテープを貼って机の位置を特定しました。昼食とお茶菓子を毎日提供する際も、対面での食事を避けるよう、会場後方に席を離して互い違いに座ってもらいました。昼食には、一人ずつ密封容器に入ったもの注文し、感染対策を徹底しました。



グループワークではフェイスシールドを着用した。



机を動かしても定位置に戻しソーシャルディスタンスを保つため床にテープを貼った。



昼食では、会場後方にテーブルと椅子を離して互い違いに配置し、対面を避けた。

● 来日による本邦研修に近づけるための工夫

来日による本邦研修であれば、日本の学校を視察して実際の授業を見て、給食体験をし、先生たちとディスカッションをする機会が持てるはずでした。また、教科書会社を訪問したり、鎌倉の文化と歴史を学ぶ機会も持てるはずでした。しかし、オンライン研修ではそれが叶いません。そこで、日本の学校の5年生国語の授業をビデオで観察し、講師と研修員で議論する講義を新設しました。また、ミャンマーにおいても新型コロナウイルスの影響で学校が休校になっていることから、一足先に学校再開した日本の現状を紹介する講義を設けました。これらの講義は、日本の学校現場に研修員が触れることができる貴重な機会となり、研修員からは「先生のサポートにより、子どもたちの考え方や教科書の文章の読み方、考え方が深まることが分かった」、「今まで分からなかった『一人ひとりの学びが違う』ことの意味が今日よく分かった。このビデオで見たような授業をする努力がミャンマーの教員にも必要だと思った」といった感想がありました。また、来日すれば日本の文化にも触れられたはずであったことから、昼食に日本料理レストランのお弁当を注文するなど、少しでも日本の気分を味わえるよう工夫しました。



日本の5年生国語の授業ビデオ観察の講義。



日本の学校再開における登校時の様子を見せたスライド。



日本食レストランから昼食を注文して日本の気分を少しでも味わってもらった。

● 双方向のやりとりをできるだけ研修に取り入れる工夫

一斉講義型でオンライン研修を行うと、どうしても講義が一方通行型になりがちです。そこで、講師には、質疑応答の時間を多めに取ることをお願いしました。その結果、質疑応答やディスカッションを十分行い、研修員とのやり取りを重視した講義に対して、研修員から高い満足の声が寄せられました。「講師が各研修員の名前を呼び『どう思うか』を聞いてくれた。オンラインで双方向のやり取りが難しい中、自分たちを覚えてくれてやる気が出た。自分が実際に5年生の子どもになったつもりで日本の授業ビデオの講義に参加した」といった感想がありました。また講義を受けるだけで終わらず、アウトプットの機会を確保することを目的に、毎日の終わりにリフレクションの時間を設け、研修員がその日学んだことを書き自由に発表してもらいました。研修初日は緊張もあって静かだった研修員たちも、リフレクションで自由に話す機会を持つてからは、翌日以降、活発に質問や意見を発するようになりました。研修員からは「質疑応答と毎日のリフレクションの時間が気に入った。ミャンマーでは、講義後の質問は1つくらいしかできず、一人が3〜4件も質問やコメントをすると失礼かと考えてしまうが、この研修では『たくさん質問していい』と奨励してくれるのがよかった」といった声が寄せられました。



スクリーンに映る講師に質問する研修員。



講師と他の研修員たちに授業の感想を発表する研修員。



日本側からグループワークを支援できるように、通訳者が会場を回り、状況を伝えた。

研修成果の発表会

こうした環境で毎日講義を受けた上で、研修4日目にグループワークを行いました。グループワークでは、1)教科書開発・改訂政策、2)カリキュラム・教科書開発、3)カリキュラム実施（学校での授業実践）、4)アセスメントの4つの切り口についてミャンマーと日本の違いを分析し、習得した知見を今後ミャンマーでどのように活用できるかを話し合いました。5日目に、4つの切り口のうち特に関心の高いピックについて、各グループが発表をし、講師とJICA担当者が質問とコメントをしました。「カリキュラム・教科書開発」について議論したグループは、「子どもの知的発達段階に応じたカリキュラム開発」、「定期的なカリキュラム・教科書改訂、教科書検定システムの構築」を提案しました。「カリキュラム実施（学校での授業実践）」について議論したグループは、「全関係者に新カリキュラムについて理解してもらう」、「現職教員同士の学び合いでカリキュラムマネジメントを行う」、「教員に対する研修をより多く実施する」ことなどを提案しました。「アセスメント」について議論したグループは、「全国学力調査の実施と結果の活用」、「アセスメントに関する現職教員と教員養成校での研修」などを提案しました。これらの発表から、研修員が研修内容を十分に理解し、ミャンマーでの次のアクションに結び付けられたことが分かりました。



グループワークをする研修員たち。



ミャンマー側で成果を発表する研修員。



ミャンマー側の発表スライド画面を見ながら日本側からコメント・質問をする。

研修員の声

オンラインという制約にもかかわらず、研修員は全ての講義に熱心かつポジティブに参加していました。研修員からは、「研修受講前からどんな研修になるのかワクワクしていたが、研修中ずっと関心を持ち続けて受講することができた」、「日本に行くことができなくても、日本の授業ビデオを観たり、講義で富士山の写真を見たりでき、日本を味わいながらモチベーションも保つことができた。これからも学び続けたい」といった声が寄せられました。

研修員 7 名は、シニア層、中堅層、若年層に分かれていましたが、それぞれの経験に応じた学びが得られたようです。シニア層の研修員は「CREATE 参加前は、教科専門知識しか持たなかったが、プロジェクト活動を通して日本人専門家やミャンマー人同僚と議論する中で考え方が変わってきた。さらにこの研修を受けて、自分の教科書開発者としての役割が明確に見えてきた。CREATE 終了後、所属先である教員養成校に戻ったときに、どのように生徒に学んだことを伝えていくべきか分かってきたように思う」と言っていました。若年層の研修員は「CREATE に参加してまだ 1 か月。色々と分からない中で研修を受けたが、分からないことが分かったり、誤解していたことを正しく理解したりすることができ、もっと学びたいと思った」と言っていました。全体としても、研修内容・プログラム構成・講師、研修運営、研修員自身の理解度・目標達成度に対する満足度は大変高く、「オンライン研修にもかかわらず本当の対面研修のようで多くのことを学ぶことができた」、「オンライン研修の実施方法もプログラムも非常に体系的なものだった」といった声が寄せられました。



閉講式での修了証書授与。JICA 担当者が閉講式を遠隔で進行した。



最後はミャンマー側と日本側合同で記念撮影を行った。



閉講式後のお別れの時はミャンマー側と日本側で手を振り合った。



2020 年 10 月は、5 年生の教科書・教師用指導書作成の仕上げの時期となります。このオンライン研修で日本の事例から学んだことが、プロジェクトの最終段階で活かされるとともに、プロジェクト終了後も、ミャンマーでのカリキュラム・教科書改訂プロセスや、教育現場、そして今後の教育政策の策定に活かされることを願っています。

文責：藪田みちる（国内研修担当）